

富山市立図書館

図書館だより

第66号
2015.3

富山市立図書館の歩み

1. 変遷



大正時代に建てられた旧富山市立図書館

旧富山市立図書館は、明治42年（1909年）皇太子の行啓を記念して、県内最初の市立図書館として設置されました。創立当時は富山市役所の一部を館舎とし、明治43年10月に元富山税務署跡へ移転しました。大正元年12月に、辰野金吾博士の設計した建物が富山公園地内に新築されました。

昭和9年には、県の『中央図書館』に指定され、昭和18年4月に県立図書館と合併し、その蔵書などは県立図書館に引き継がれました。館舎は旧市立図書館を本館とし、旧富山城跡内の大正会館が別館となりました。

昭和20年8月1日富山大空襲で館舎が全焼しました。8月22日県庁に臨時事務所、12月県立神通中学校（後の県立中部高校）に仮事務所を設け、昭和21年4月、神通中学校至誠堂内に仮閲覧所で開館し、昭和24年9月富山市表町（現在の新総曲輪）県庁前広場の旧武徳殿跡に新館舎が再建されました。

戦後、県立図書館として県内の文化の発展に寄与しました。昭和44年に県立図書館が呉羽山西麓の茶屋町に資料館として移転しました。

昭和45年に、富山市制80周年記念事業として、貸出業務を中心とした図書館が富山市城址公園内北西部に建設されました。

総工費は5億4480万円、地下1階、地上7階、面積6961㎡の建物で、読書室・児童室・学習室などが設けられ、昭和45年6月に開館しました。

（『富山県史 通史編Ⅳ 近世 下』、『富山県史 通史編Ⅴ 近代上』、『富山市史 通史 下』、『富山県立図書館年譜』を参照し作成）



本館外観（完成直後）

2. 沿革

昭和45年6月 富山市丸の内1丁目1-50に開館

昭和46年10月 自動車文庫の巡回サービスを開始
（昭和48年9月2号車、50年9月3号車）

昭和47年9月 最初の分館、水橋分館を開設

（平成12年8月15日館目の東部分館開設）

- 昭和 48 年 11 月 視覚障害者に対する録音（音訳）
図書の郵送サービスを開始
- 昭和 54 年 5 月 身体障害者に対する書籍小包郵送
のサービスを開始
- 平成元年 9 月 図書館コンピュータシステムの
稼動
- 平成 8 年 4 月 翁久允文庫開設
- 平成 11 年 11 月 山田孝雄文庫開設
- 平成 15 年 12 月 駅前 C i C ビル内に図書サービス
コーナー開設
- 平成 17 年 4 月 市町村合併により、図書館施設が
本館 1 館、地域館 6 館、分館等
18 館となる
- 平成 19 年 10 月 4 分館の業務委託開始
(平成 25 年 10 月 11 分館委託化)
- 平成 20 年 7 月 とやま駅南図書館「ぶらり」開館
- 平成 22 年 11 月 岩倉政治文庫公開
- 平成 25 年 3 月 こども図書館開館
(『富山市立図書館事業概要』平成 25 年度版より作成)

3. 数字でみる本館の 45 年間の変化

(昭和 45 年度・平成 25 年度の比較)

・本館の所蔵冊数	昭和 45 年	48,867 冊
	平成 25 年	377,513 冊
・1 日の平均貸出冊数	昭和 45 年	515 冊
	平成 25 年	1,291 冊
・調査相談年間件数	昭和 45 年	744 件
	平成 25 年	1,963 件
・窓口予約年間件数	昭和 45 年	1,684 件
	平成 25 年	16,286 件
・自動車文庫の台数と駐車地数	昭和 45 年	1 台 / 34 ヶ所
	平成 25 年	3 台 / 132 ヶ所

(『富山市立図書館事業概要』昭和 45 年度版、平成 25 年度版より作成) (本館 尾屋)

ただいま建設中！新図書館情報 vol.3

「TOYAMAキラリ」完成間近



グランドプラザから望む

西町南地区再開発ビル「TOYAMA キラリ」の完成を間近にひかえ、夜遅くまで工事が行われています。建物外装はほぼ完成し、現在は敷地内の外構工事や内装の仕上げ作業が進められています。

夕暮れ時、ビルに明かりが灯ると館内の様子がガラス越しに見えます。3 階へのびるエスカレーターや大きな吹き抜け、図書館の書架も見ることができました。



夜の「TOYAMA キラリ」

図書館では現在、約 38 万冊の蔵書の引越しや資料の配置計画、新館に備える資料の収集と整理を行っています。本館は、新本館への引越作業と開館準備のため、5 月 7 日（木）から 8 月 21 日（金）まで臨時休館させていただきます。皆様にはご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。（本館 瀬口）

本館の臨時休館期間 平成 27 年 5 月 7 日（木）～8 月 21 日（金）

落語のせかい

今回は落語の本をご紹介します。はじめは、落語の世界をより身近に感じるための1冊です。



『江戸落語の舞台を歩く』

河合昌次／著
東京地図出版 2009

酒飲みの主人公勝五郎と妻の人情噺として知られる落語『芝浜』には、勝五郎が財布をひろう場面があります。落語がつけられた江戸時代には河岸でしたが、現在は埋め立てられ、東京の港区にある「本芝公園」となっています。

この本では、落語では耳にしても現在は失われてしまった地名や建物を、著者が独自に調査し、現代の地図に表しました。地域ごとに、2時間ほどの散策コースとして紹介されているので、お気に入りの落語の舞台を一緒にたどってみてはいかがでしょうか。

さて、次にご紹介するのは、川柳で落語を楽しむ本です。



『落語と川柳』

長井好弘／著
白水社 2013

落語の中には、しばしば江戸川柳が登場します。たとえば、「三方一両損」や「大工調べ」など、金銭にまつわる噺によく使われる一句があります。

「江戸っ子の生まれ損ない金を貯め」江戸っ子といえば、「宵越しの金を持たない」という言葉にあるように、金銭に執着しないのが信条で

す。しかし、現代に生きる私たちが、当時の見栄を理解するのは難しいものがあります。

そこで登場するのが、江戸川柳です。知識や説明がなくとも、たった17音でわたしたちに江戸時代の雰囲気を感じさせてくれます。

著者は落語の中の江戸川柳を「名脇役」と言います。たった一句で落語の世界を引き立てる川柳、みなさんもぜひ楽しんでみてください。

最後は、富山県出身の落語家、立川志の輔さんの本です。



『満月のわらい』

立川志の輔／著
ぴあ 2004

この本には、志の輔さんが主催した落語と狂言の競演「満月の会」から、プログラムの一つである対談が収録されています。志の輔さんの巧みな話術は、狂言師たちの意外な一面をどんどん引き出していきます。

芸の垣根を越えて競演することで、志の輔さんは落語も狂言も、お客さんを笑わせる、という点で違いはないということに改めて気づかされます。

落語だけでなく、狂言にも興味のわく1冊です。

富山市のまちなか、中央通りには志の輔さんプロデュースの演芸ホール「てるてる亭」があります。ここでしか味わえない、富山ならではの落語が聴けるそうです。

今夏、市立図書館本館も装い新たにまちなかへ移転します。落語を楽しんだあとは、お近くの図書館にもお立ち寄りください。（本館 崎川）

レファレンスあれこれ

Q. 再開発の進む富山市西町周辺について、明治から平成にかけての歴史を知りたい。

A. 富山市西町は、図書館本館や、富山市ガラス美術館の入るビル（TOYAMA キラリ）の建設をはじめとして再開発が進み、今、注目を集めています。

まず、明治から大正にかけての街の様子を調べるために、「西町」や「総曲輪」をキーワードに資料を探してみました。すると、『総曲輪物語 繁華街の記憶』（桂書房 2006）や、『総曲輪懐古館』（巧玄出版 1977）にその一端が綴られていました。

それらによると、総曲輪が繁華街として発展していくきっかけは、浄土真宗の本願寺派、大谷派の両別院が、濠を埋め立てて建設されたことにありました。明治 21 年に両別院の仮本堂が完成すると、多くの信徒がお参りに集まり、そば屋や弁当屋などの商店が軒をつらねて、発展の基礎となっていたことがわかります。やがて、芝居小屋や映画館も完成し、大変華やかであったようです。

また、『大正職業別明細図之内富山市』（地図資料、複製）では、大正 14 年当時の商店などの名前を見ることができました。ちなみに、新図書館の入るビルのあたりを見ると、乾物店や金物店といった商店が連なっています。

さて、昭和に入るとデパートが街のシンボルとなりました。大正 12 年、富山のデパートのさきがけである「岡部呉服店」が完成し、昭和 7 年には大和富山店の前身、宮一大丸が開設されます。

『大和五十年のあゆみ』（金沢大和 1972）には、その近代的なビルの写真が掲載されています。また、開設の際の店員募集には、女性店員 45 名の採用に対し、550 余人の応募者があったことが書かれており、デパートガールは当時の憧れの職業であったようです。

『大和五十年のあゆみ』には、「昭和 20 年 8 月 1 日戦災で焼け落ちた富山店」と題して、富山大空襲の被害にあったビルの写真も掲載されています。その様子は、『富山戦災復興誌』（富山市 1972）でも、写真で確認することができました。

また、編年体でまとめられた『富山市史第 3 巻』（富山市 1960）の昭和 20 年の項を開くと、「昭和二十年八月十八日 大和富山店は戦災後休業していたが、疎開先から商品を取り寄せ、本日から営業を開始した」とあります。同じく昭和 20 年 11 月には、大和富山店の 6 階を改装して映画劇場とし、戦災市民に三日間無料公開したことが記され、空襲の惨禍からいち早く立ち上がった様子が見えます。

戦後の街の様子は、『石川富山昭和あのと き ストーリー編』『同、アルバム編』（北國新聞社、富山新聞社 2014）に、豊富な写真で掲載されています。昭和 30 年代の中教院夜店の様子や、初売り客でにぎわう 40 年代の中心商店街の写真が並び、往時をしのぶことができます。

しかし昭和 60 年代に入ると、郊外に大型店が次々に完成した影響もあり、客足は減少していきます。『富山市歩行者通行量調査』（富山商工会議所 1991）を見ると、中央通りにあったマクドナルド前の日曜日の通行量が、昭和 47 年では 4 万人近くになっていますが、それ以後は大幅に下降していったことがわかります。

平成に入り、富山市中心市街地の活性化が計画されると、平成 19 年には「富山市まちなかにぎわい広場」（愛称：グランドプラザ）が完成しました。

『にぎわいの場 富山グランドプラザ』（学芸出版社 2013）では、新たな賑わいを創出するための仕組みがわかりやすく紹介されています。新図書館の入るビルをはじめ、これからの街の発展が楽しみです。（大沢野図書館 水島）